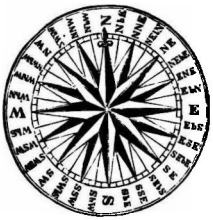
ノルウェーから来た鯨とり

川村たかし



偕成社の創作文学

ノルウェーから来た鯨とり

NDC 913　　偕成社　228p　21cm　1979年

1979年2月　初版第1刷

著　者　川村たかし
発行者　今村廣

発行所　株式会社　偕成社
東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3の5
TEL (03) 260−3221 (代) 〒162
振替　東京5-1352番
本文印刷　新興印刷製本株式会社
多色印刷　小宮山印刷株式会社
製　本　文勇堂製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。
8393-720190-0904
©川村たかし　1979
Printed in Japan

ノルウェーから来た鯨（くじら）とり

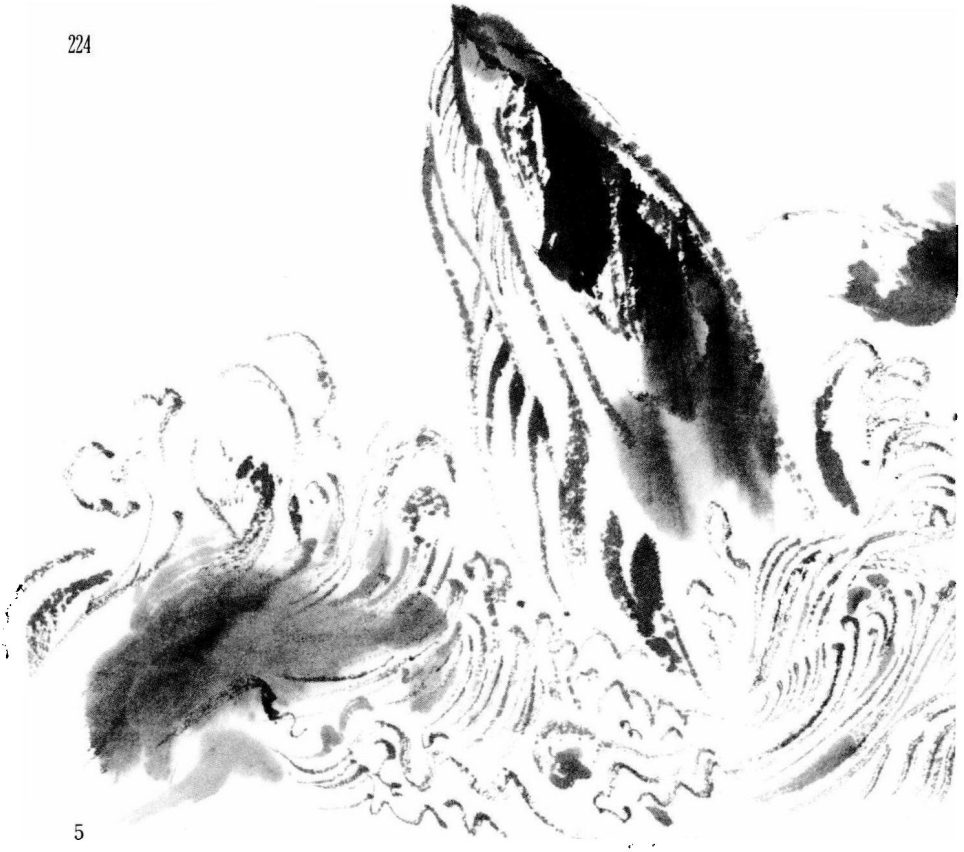
川村たかし著／斎藤博之絵

ノルウェーから来た鯨とり／もくじ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第1章　鯨の村
1　ゴンドウのむれ　8
2　異人さん　19
3　もちまき　28
4　ひげの船長　36
第2章　黒潮の海へ
1　二階の親子砲手　46
2　再会　53
3　ゆれる村　65
4　魚見桶　74
第3章　海かたむいて
1　海ツバメ　82
2　大マッコウ　89
3　血の大潜水　98
4　えものをひいて　106

第4章　小さな砲手
1　ひさしぶりの大漁　114
2　招かれざる客　122
3　わかれ　132
4　人間の心　鯨の心　141
第5章　北の漁場
1　きりが晴れるとき　153
2　ダーセンのこぶし　161
3　うたう鯨　170
4　海のカッパ　179
第6章　人間燈台
1　オラフのラケット　188
2　不吉なまえぶれ　201
3　赤いあらし　211
あとがき　223
作家と作品について＝大藤幹夫



作者・**川村たかし**（かわむらたかし）
1931年，奈良県に生まれる。奈良教育大卒。現在，五條高校教諭，日本児童文学者協会・日本児童文芸家協会会員。主な作品は『川にたつ城』『凍った猟銃』『ふんどし校長』『熊野海賊』『山へいく牛』（1978年野間児童文芸賞受賞），『北へ行く旅人たち』『広野の旅人たち』等多数ある。住所／奈良県五條市新町 2-1-14

画家・**斎藤博之**（さいとうひろゆき）
1919年，中国瀋陽に生まれる。帝国美術学校洋画科卒。毎年，銀座・日本橋等で個展を開催。『教室205号』『凍った猟銃』『花咲か』『三太の杉』『ちゃんめら子平次』『山へいく牛』等の挿絵のほかに，『しらぬい』（講談社出版文化賞絵本部門受賞）『がわっぱ』など，絵本の作品も多い。住所／鎌倉市笛田 1779-12-1

ノルウェーから来た鯨(くじら)とり

川村たかし

第1章
鯨（くじら）の村

1　ゴンドウのむれ

くらい海がゆたゆたとながれている。水平線にはつみあげたような雲がほの白く星明かりにくずれて、月はない。

波がしらにのしかかるように一そうの小舟（こぶね）がゆすりあげられたとき、

「や、いてるのとちがうか。」

へさきのほうでひとりの少年が腰（こし）をうかした。たしかめるように、とものほうでもむくりと黒いかげがのびあがって、

「ふむ、ヒキてるの。」

ひくい声がかえってきた。波のあいだにほんのりと白い光がたゆたうのが見えた。鯨（くじら）がそこにいる。

小舟は方向をかえた。音をしのばせた五丁（ちょう）のろがおもい海をかきながらにじりよっていく。星明かり

の海に、胸びれや尾びれが鱗光をはなつのをヒキルといった。ゴンドウ鯨たちはむれをといて、イカをあさりだしているらしい。

小舟の男たちは背をまるくして、海面をすかし見た。なるたけこちらの気配をけさねばならない。鯨が満腹ならともかく、まだ今夜の食事にありついていないなら、音には敏感だった。

「一つかよ、一つじゃなかろ。」

と、前ろをにぎる弥八が腰をうかすと、

「一つなものか。それよりなんやらおかしなぐあいじゃよ。」

大脇ろの熊蔵がひそとこたえた。

「ちかくにサメでもいるのかのし。」

海面がざわめきたっているのだ。

ふつう、ゴンドウ鯨は夜になると陸にちかづいてくる。イカをあさるためだった。波のゆるい潮だまりでねむるためでもある。ねむるとき、いくつものゴンドウ鯨は頭をなかによせあつまった。キクの花弁のように見えた。だが、しばらくするとむれはえさをもとめてちらばる。順序がぎゃくのときもあったが、一頭を見つければちかくになかまがいるとみてよい。

ところが、今夜はようすがちがった。黒い波間でひかる鯨はねむっているのでもなければ、えさをあさっているのでもなかった。しきりにさわいでいた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「親方、紋太夫の親方。あんじょう見たっておくれ。」
弥八が声をかけたが、そのまえにともにいたずんぐりした男は、背をかがめて小舟のまえへ出た。
「何ごとですやろ。」
返事のかわりに弥八の肩のところをおさえておいて、紋太夫はかたひざをつくと、くらい波のむこうをのぞきこんだ。風があるわけではない。それなのにひとつところが波だっているというのは、異変がおこっている証拠だった。
「なんじゃろな。」
紋太夫は首をかしげた。五人の男たちもろをひきあげて腰をうかせた。くらい。が、いくつも白くひかる鯨のひれは波に見えかくれしている。
「はっきりはわからんが、これはもしかすると——」
紋太夫のことばにかぶさって、
「ん、お産じゃろう。」
ともろの与六がすきま風のようにささやいた。五丁のろはうしろから、ともろ、合ろ、前ろ、大脇ろ、五丁ろとよぶ。そのうちのともろはベテランがにぎっていた。ゴンドウ鯨の漁のよしあしは、ともろの腕ひとつにかかるといわれていた。方向をきめるろだからだ。

「あっそうか、なるほどお産かよ。」
弥八が感にたえたような声をだしたとき、十五、六メートルまえの海面がむくりとふくれあがった。つづいて水の音がした。
「跳んだ。」
少年がうめいた。
「ほら、また。」
くらいのではっきりとはわからない。が、波がしらの一つがぽこっとふくれてもりあがり、何メートルかむこうで水音がおこる。鯨は一頭だけ、つづけざまにジャンプしていた。
「おそらく、あたりは血でまっかであろうよ。」
与六じいさんは、顔にはねるしぶきをはちまきでぬぐうぐあいだ。
「子をうんだ鯨がいちばんこわいのは、サメじゃ。血のにおいをかぎつけてすっとんでくるからのし。ま、このへんではめったとサメもいなかろうが、跳ぶのは生まれながらの本能つろ。手羽の下に生まれたばかりのややをかいこんではねるのじゃわ。」
「かいこんで――」
少年はうなった。胸びれの下に赤ん坊をだきかかえて跳ぶというのか。男たちはだまって波だつ海面をながめていた。なにかひたひたと胸にせまってくるおもいものがあった。あたらしいい

のちが生まれたと知って、なかまの鯨たちはえさをおうのをやめ、海面に乱舞している。それは暗夜の海のささやかな祝賀会といえた。そのあいだに母鯨は血のにおいをあらいおとして、こんどは手羽の上に子どものをのせてとおくまでおよぎさるという。耳をすますと、ピーピーというねずみ鳴きのようなかすかな鯨の声が聞こえた。

紋太夫はつるりと顔をなでると、

「さ、ぼちぼちいくか。」

背なかをしゃんとのばした。いつのまにか右手にはモリを持ち、かた足をふみだしてすっくとへさきに立っている。はおっていた刺子をぬぎすてた裸像は、きりりとたくましい。五丁のろがまたしずかに海をこねはじめた。

クリクリクリクリ……。

ろがきしんで間をつめると小舟は波にガブリだしている。ほとんど無警戒な小さな鯨たちはしきりに息をはき、水にもぐった。紋太夫のからだがゆっくり後方へしなる。と見るまもなく、へさきのよこに頭をもたげてきた一頭へシュッとモリがとんだ。つぎのしゅんかん、波のいっかくがザバッとくずれた。だしぬけの一撃に鯨はいちど空にはね、はげしく海をたたく。足もとのつながするするとたぐりよせられていく。

「こげ、はなれるな。」

与六じいさんのだみ声はもうさっきのすきま風のようではなかった。どなりつけておいてぐいとこぐ。男たちはおく歯をかみしめて、こぎにこぐ。このまま走られてしまえばながびくのが見えていた。とどめをささなければならない。

紋太夫は無言。こんどはいくらかふといべつのモリを肩の上からねらいをつけて、ズコッとついた。手ははなさず、そのままこねる。

「やった。」

少年の声がうわずって、

「父ちゃん、持っていかれるなよ。」

その心配は必要なかった。鯨はひとはねからだをふるわせたが、そのままだんだんしずかになっていく。

「ひろうのはあとや、ちらばるまえにおわんかい。」

紋太夫のずんぐりしたからだが、少年のろにとりついた。いまおわなければ、むれはちりぢりになる。すばやく二番めのえものをしとめなければならない。クリクリといそがしくろがくねったが、紋太夫は少年をはじきとばしてふたたびへさきに立った。えものはいた。どういうわけか小舟がちかづいていくのにげようともせず、ザワザワと波を立てている。

モリをかまえたまま、紋太夫の手がはたととまった。海の上になにやら小さな黒い物体がうい

ていた。その黒いものを一頭のゴンドウ鯨が、しきりにつきあげていたのだ。

はじめ男たちにはサメかなにかが鯨をひきさいているかのようにうつった。しかし、大きいほうはサメではない。とすると——小舟はなおもちかづいていく。そこでみんなはろをこぐ手をとめて、まじまじと海上をのぞきこんだ。

小さな黒い物体は子ども鯨だった。もしかしたら、さっき生まれたばかりの赤ん坊かもしれない。子鯨は死んでいた。死んでしずみかかるのを、母鯨がなんとかしてうかびあがらせようとむちゅうなのだ。つきあげておいておよぎだす。しかし子どもはゆらゆらとしずむ。とってかえしてまたつきあげる。子どもははずみで波の上にすがたをあらわす。そのたびに母親は安心したようにピーッとかすかに鳴いた。

ほとんど小舟のそばでおこっているこのかなしいできごとを、男たちはしんと見ていた。しかし、紋太夫は思いなおしたように顔をあげると、はげしくモリを突きたてた。母鯨はいまになって人間がすぐそばにいることを知り、だっと頭からぶちかましてきた。あやうくかわす。尾羽がピシャリと水をたたいたので、しぶきが小舟をおおった。うねりがろを持っていこうとする。しかし、紋太夫はかけぬけようとする鯨の胸に、からだごとモリをおしこんでいた。

「ふうっ。」

と、弥八がおどけてみせたが、だれもわらわなかった。いそいでつなをたぐりよせる。つなのさ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com